

その他

「長岡中央総合病院八十年のあゆみ」補遺
——未見の新史料発見——

長岡中央総合病院、形成外科；元部長¹⁾、長岡中央総合病院；副院長²⁾、
長岡中央総合病院、総務課³⁾

星 榮一¹⁾、富所 隆²⁾、藤田 史彦³⁾

平成27年12月に「長岡中央総合病院八十年のあゆみ」を上梓した。その後、総務課の倉庫から未見の写真等が発見された。これ等の資料が再び埋もれてしまわないように、本誌に収録した。20年後の「病院百年史」に活用してもらいたいと願う。

キーワード：長岡中央総合病院、八十年のあゆみ、八十年史、病院史、中越医療組合病院

長岡中央総合病院では、平成27年12月に「長岡中央総合病院八十年のあゆみ」(以下「あゆみ」)を上梓した。昭和10年に病院が創設されて以来初めての記念誌であるので、資料が少なく苦労した。ところが、平成28年1月に病院総務課の倉庫を整理中に、表書きのないダンボール箱があり、中には「永久保存」と書かれた封筒が入っていた。封筒の中には未見の重要な写真等があった。もう半年早く発見されていれば「あゆみ」に収録出来たのに残念である。これらの資料が再び埋もれてしまわないようにここに記録し、20年後の「病院百年史」に収録していただけるように願っている。

以下に新資料を使用して、長岡中央総合病院の歴史をダイジェスト版でたどってみたい。

1 中越医療組合病院の創設

昭和7年6月に三宅正一が長岡市議会議員に初当選したことを切っ掛けとして、長岡に農民や労働者のための医療組合病院を設立する準備を始めた。しかし、医師会や地主層の反対で、なかなか県知事の開設許可が下りず、ようやく昭和9年4月2日に開設許可があり、造成された新栄町の埋立地に昭和10年6月25日に鉄網コンクリート造り(コンクリートモルタル)で、準耐火構造2階建てが完成した。昭和10年7月10日に開院式を行った。写真1は開院間もない頃に、玄関前で撮影した全(?)職員の写真である。玄関の様子がよくわかる。

「中(越医療組合)病院」の文字も読み取れる。初代院長・浜野秀作は東京警察病院内科から起任された。

2 院長の交代と病院閉鎖

初代の浜野秀作院長は1年で退職し、昭和11年に2代目：小林敏弥院長(写真9)に交代した。病院の敷地は信越線の東側の埋立地で、民家もまばらで市内と言っても過疎地のような所であり、冬季には道路の確保もままならなかった。病院経営が立ち行

かなくなり、昭和13年6月には一部の職員の給与不払いもおこり、同年10月末にはついに病院閉院のやむなきに至った。

3 丸新連合会長岡中央病院としての再出発

昭和14年11月に丸新連合会(新潟県販売購買利用組合連合会)が、中越医療組合病院を7万円で買収し、再建することを決定した。昭和16年7月1日に、名称も丸新連合会長岡中央病院として内外装も新たに再開院した。写真2は病院再開を伝える新潟県中央新聞第20518号で、一面全部が残っている。「あゆみ」編集時には完全な紙面を入手できなく、紙面の下半分が破れて欠落していた。本論文写真1の玄関の屋根と再出発時の玄関を比較してください。第3代院長は新潟医科大学より坪井清三郎(写真10)が就任した。しかし、院長は就任間もなく軍隊に召集された。写真3は戦地の坪井院長に送った改築された玄関前の昭和16年11月の写真である。

4 病院の再出発を伝える新潟県中央新聞(写真2)のトップ記事

県下全産組員待望裡に丸新中央病院開院
刀圭界の権威を迎えて華々し

長岡市新栄町なる緑の草原に輪奐の美を誇る新潟県中央病院は愈々新装成って本29日午後華々しく開院式を挙行することとなった。数奇の運命を辿った本院が県下全産業組合の総意の下に再発足を決したのは昨冬であった。

爾来1ヶ年半の歳月は専ら内部の施設整備に費やされ、その間県当局斡旋の下に新潟医大当局と数次折衝の結果は、医員私底の今日にも拘わらず各科毎に何れも斯界の権威者を網羅し得て茲にこの喜びの日を迎え得た事は唯単なる丸新連合会なるのみの喜びであってはならない。今や本県産業組合は県下に約500組合を算しこの組織分子たる産業組合員は18万と註されている。従って今日のこの盛典は正に県下18万産業組合員の喜びである筈である。

聖戦下高度国防国家建設完成の要請に応える農村に課せられたる使命は国家の兵力労働力、糧食の兵站基地としての任務を完遂する事であろうが目下大陸硝煙の野に馳駆する第一線有志の6割5分が農村出身者なるに鑑みる時、健康の農村人を作り上げることが如何に聖戦目的貫遂の上に緊急なるものであ

るか蓋し思い半ばに過ぐるものがある。

然るに茲に農村医療を対象とする産組医療病院が県下全農村経済運動の中核として強大なる経済力を有する丸新連合会経営の下に新発足を試みることは正に県下18万産業組員、否県下全農村民願望の夢が茲に実像を以て現れたと云うべきであろう。

開院当初は施設の関係から診療区域に限られるとはいへ県連経営の建前から急速に施設を充実し全県的にその医療網が張り巡らされるであろう。斯くして農村に二豎なからしめ得ば邦家の益する所亦甚大と言わざるを得ないだろう。

- 5 昭和20年8月1日の戦災と長町の戦災復旧仮病院
昭和20年8月1日夜、米軍B29型爆撃機による油脂焼夷弾の爆撃により、長岡市の市街地の約8割が焼野原になった。病院も全焼したが、患者は全員無事であった。

被災後、市内のあちこちで診療を続けたが、長町2丁目の津上製作所女子寮を買収し、内部改装を行い9月1日から仮病院として再出発した。

写真4は、昭和23年3月、長町の仮病院玄関前で准看護婦養成所卒業生と全職員。

- 6 戦後の新病院の開設
昭和24年に、戦災前の新築町の病院跡地に1800万円の予算で新病院新築工事が始まった。昭和25年1

月に完成し、長町から移転した。写真5は昭和25年4月に撮影された新病院の玄関前での全職員の写真である。写真6は昭和26年3月に撮影した病院玄関前の准看護婦養成所卒業生と全職員。写真7は昭和25年に再建された病院の玄関で、昭和33年以降に撮影されたものと思われる。写真8は再建された病院のスロープ階段。

以上の10枚の写真は「あゆみ」には収録できなかったものである。病院総務課で保管しているので、20年後に発行するであろう「長岡中央総合病院百年史」には是非収録していただきたいと願っている。

ついでに書き加えるが、「あゆみ」に収録しなかったもので、昭和49年に中山康夫先生が編集された「いない」第51、52号に元職員の佐藤伍郎氏の病院戦災体験記がある。これを百年史に収録出来ればと思う。

参 考 文 献

1. 長岡中央総合病院編。病院八十年のあゆみ、2015。
2. 厚生連中央総合病院編。いない。1974；第51、52号。
3. 星榮一。「長岡中央総合病院八十年のあゆみ」のこと。ぼんじゅーる。2016；431：12頁。



写真1 昭和10年開院時の病院玄関前での職員の集合写真。玄関の角型の屋根に注目。
初代院長・浜野秀作（在任昭和10年～昭和11年）



写真2 新潟県中央新聞、第20518号、第3面、昭和16年6月29日号。
昭和13年10月に閉院し、丸新連合会長岡中央病院として再開院を報じた地元新聞
〔あゆみ〕21頁の写真は下半分が欠損している。



写真3 昭和16年11月、病院再開後に医師達が玄関前で撮影し、戦地の坪井院長に送った写真。
(改築した病院玄関)



写真4 昭和23年3月、長町の仮病院玄関前で准看護婦養成所卒業生と全職員。



写真5 昭和25年4月、戦災後福住に再建された新病院の玄関前で全職員。
第5代院長・長谷川亀之助(在任昭和23年～昭和28か29年)



写真6 昭和26年3月、病院玄関前で準看護婦養成所卒業生と職員。



写真7 昭和25年に再建された病院玄関。昭和33年以降の撮影。



写真8
スロープ階段

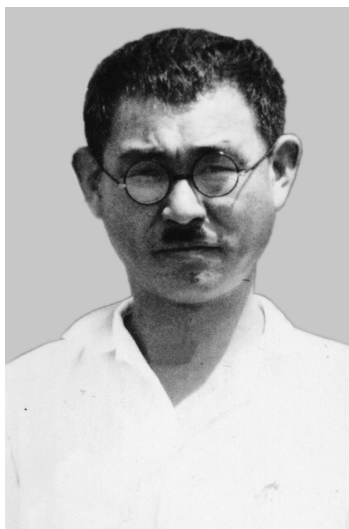


写真9 第2代院長・小林敏弥
(在任昭和11年～昭和13年)



写真10 第3代院長・坪井清三郎
(在任昭和16年～昭和19年)

(2017/02/06受付)